

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(19)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月29日に行われたドルトムント公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Westdeutsche Allgemeine

March 11, 2020

Anke Demirsoy

ドルトムントに日本から来客

東京のNHK交響楽団、パーヴォ・ヤルヴィ、ソル・ガベッタとのコンツェルトハウスでの一夜

ウォルフガング・サヴァリッシュ、シャルル・デュトワ、ウラディーミル・アシュケナージ等の指揮者が、1926年に創設された日本の公共放送局のオーケストラ、NHK交響楽団の歴史に名を刻んできた。何十年もの時間を経て、この楽団で如何なる音楽の文化が育まれてきたかをドルトムントのコンツェルトハウスで体験することができた。首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィのもと、ヨーロッパ公演でドルトムントを訪れたのである。

この夜のメインプログラムであるブルックナーの《交響曲 第7番》では、神秘的な自然音が見事なほどの滑らかさで送り、激情をこめて高まっていき、頂点に到達する。ここではモチーフの繋がりが明確に表現される。荘厳ながらも厳粛過ぎない拡張されたアダージョは1883年に亡くなったリヒャルト・ワーグナーの響きである。自らの作品《ニーベルングの指輪》のために作られたテューバは哀調を帯び、運命を決定づけるかのような音色であるが、変容も告げる。

言うまでもなく金管奏者はフィナーレで再び存在感を示す。このクラスのオーケストラになるとコンディションは問題ではない。危うい綱渡りはしない。ヴァイオリンの響きは時折脆さを感じさせ弦楽器はフォルテッシモで音階を急降下する箇所では時に不気味な様相を呈するが、充満した美しい旋律がこれらを覆い隠す。

武満徹のオーケストラ曲《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》の印象主義的で穏やかな序曲では

クロード・ドビュッシーの親縁性を否定することはできない。これに続くロベルト・シューマンの《チェロ協奏曲》ではアルゼンチン出身のソル・ガベッタがロマンチックなトーンの中に浸ることなく響きの繊細さを届けた。卓越した技量を要するパッセージでは激しさをもって巧みに熟す。アンコールで演奏したペテリス・ヴァスクスの《チェロのための本》では、美しい響きに乗せて聴衆の心に届く歌声を聴かせた。